

B. 55

209
582

承陽大師

序

我か宗祖大師の洪徳を世に知らしむるは、永平兒孫の俱に力むべき所なり、坊間往々此類の書あるも、未だ其全豹を描きたるものあらず、痛嘆の至りと謂ふべし、茲に雄悟道兄『承陽大師』一編を著して世に公にせんとし、予をして校閲せしむ、蓋し大師の八徳を擧げて平易に講演せるもの、惟ふに大師の徳は海に布き、山に徧し、何ぞ八徳に限るべけんや、且此編、間々未了の言なきに非ずと雖も、一滴の水も亦大海の一味たることを知らば、此著亦以て大師法乳の慈恩に酬ゆるの資助たらん歟、乃ち一語を卷頭に附し以て序に代ふ。



明治三十三年四月上浣

韜

光

識

目次

- 一、眞實の佛法を弘通し玉へる御徳
- 二、意氣英邁に渡らせ玉へる御徳
- 三、深く名利を厭はせ玉へる御徳
- 四、各宗の高僧の大師に參禪せる御徳
- 五、佛教中の大難問を開示し玉へる御徳
- 六、勤王誠忠に渡らせ玉へる御徳
- 七、傑出の門弟緇素に富み玉へる御徳
- 八、深山幽谷の一道場より八百餘萬の檀信徒を出し玉へる御徳

承陽大師

木田 韜 光 閱  
芳川 雄 悟 述

緒言

私は、大本山の布教師でございますが、此度當地に於て御話を致すとは、我が曹洞宗の宗祖承陽大師の御聖徳のところでございます。段々お話し申す中には、大師様の御聖徳は、お解りになりましたやうが、何方も御存知の通り、我宗の宗祖大師は、御生誕が正治二年正月二日でございます。御年五十四歳、建長五年の八月の廿八日に御入滅遊ばされたのであるから、其から勘定をして見ますと、丁度明治三十五年が六百五十年の御正當に相成ります。それで、御本山永平寺に於かせられても、其の御法事を営みになり、全國幾百萬の御信者は、孰れも御參詣になるとでございます。從來、何様も大師の御聖徳を解り易くお話しした御方がない爲めに、種々な間違ひを生

ずるとがあつて、誠に残念でございますから、今回私は、簡短に其事をお話し申し、まづ、承陽大師の八個の徳を擧げて、信者方へお話し申さうと思ひます、併し、何分、布教に忙しい身軀で、詳しく工夫する暇もございませぬから、ホンの概略をお話しすると致します、

### 第一 眞實の佛法を弘通し給ひし御徳

さて、日本現今の宗旨で、末寺を一萬以上持つて居る大宗門は、何宗であるか云ふと、眞言宗と、眞宗と、曹洞宗との三宗であります、其他に澤山宗旨はありますが、いづれも一萬ヶ寺に充たぬ末派であります、然れば是の三宗を以て日本の三大宗門と稱しても善からうと思ひます、乍併眞言宗は古義眞言新義眞言と別れて居りますから、其上から見ますと各々一萬に足りませぬ、眞宗は十派に別れて居ります、一萬九千ヶ寺を十派に別けて見ますれば、僅かな寺院で、信徒も從て聊かござります然るに曹洞宗は派別もなにもなく、混然一致して、一萬四千の末派を有し、信徒の數は約八百餘萬もあつて、實に世界にも稀なる大宗門でござります、此の一大宗門の教

祖は即ち承陽大師様で、其本山の御場所は何處かと謂ふに、西京や東京などの繁華な所では無く、越前の國の福井の城下より四里ほど山奥で四月にも尙ほ雪の解けぬ處に立て居ります、マア世間では、祖師といへば、日蓮上人、開山と云へば親鸞上人、大師と申せば、弘法様などと、よく世の人は心得て居りますが、此の方々の様に、あまり御名前も聞えず、本山は山奥に立て居つて、それでなせ、このやうに盛んなる宗門が出来てあるかと云ふに、是は皆承陽大師様の御徳が勝れて入らせらるゝからの事である、吉野山の櫻花は山奥に咲て黙つて居れども、呼びもせぬに人が多く集り来る如く、是皆御徳の然らしむる處である、去れば先づ第一承陽大師様の御徳の中、眞實の佛法を弘通し玉へる御徳を摘んで述べましやう、今を距る七百年以前、佛教界の有様はどうであるかと云ふに、大略學問佛教、祈禱佛教、名利佛教、隱遁佛教の各種に流れ、眞實の佛法を傳へる者は無つたのである、御開山の御化導の御辭を承れば判りますが、其中に、『前入唐の諸師皆教網に滞るが故に、佛書を傳ふと雖、佛法を忘るゝ如し、其益是れ何ぞ、其功終に空し、是れ乃ち學道の故實を知らざる所以なり、哀むべし、

徒に勞して一生の人身を過さむ』と仰せられてある、御開山以前の佛教は眞實の佛教ではない、學問的佛教であつた、一念三千の觀解だとか、一念不生の法門だとか、幾等巧みに理窟を述べて見た處が、眞實の佛教ではない、ツマリ學問の分際を離れることが出来ませぬ、凡そ眞實の佛教と云ふ者は、高尚なる理論ではない、即ち以心傳心と申して、心より心に傳へるのである、理論だけなら學問佛教と云ふ者である、譬へば藥劑の能書をいくら讀みきかせられた處が、之を呑み下さなければ病の治る筈がない、唯だ高尚な文章だけ讀んで其を悦んで居る者は、少しも吾人に取りて利益のあらう筈はない、所謂文字の教網、海に布き山に偏し、海に徧ねじと雖も波の心がないから、死水で子々が湧て居るかも知れず、山に布て居るも雲の心がないから、枯れ山も同様であるぞと、御開山様が仰せられた通りである、昔し葉公と云ふ人が非常に龍を畫くことに熱心をされ、どうか、生きた龍を見たいものぢやと常々願をかけて居られたが、龍も其熱心に感じ正躰を顯して見せた處が、葉公は驚いたの、驚かないのと、沙汰ではない、膽を潰して氣絶をされたと云ふことがある、今の佛教もその如く畫龍

を愛して眞龍に驚く仲間である、これまで交り日本から入唐して佛法を傳へて來たと云ふ人は藥の功能書だけ持て來て、肝心な藥を忘れて居る人々ぢや、畫龍を悦んで眞龍を見ぬ連中ぢや、夫れ故日本にては三論宗、法相宗、華嚴宗等など、稱する學問佛教即ち能書屋は唯今では廢れて仕舞ひました、これは實際の利益がないからの事であります、それを御開山様が『前來入唐の諸師皆教網に滯るか故に佛書を傳ふと雖、佛法を忘れたるが如し』と仰せられたのである、然れば利益ある眞實の佛法を御傳へ遊ばしたは誰であらうか即御開山承陽大師様より外には無いのである、特に如來様の御説きになつた經文は五千八百餘卷ほど日本に傳はりましたが、其中唯た一部の阿彌陀經だけを擇び抜て淨土門を開いた宗旨もあれば、法華經だけを拾ひ取りて開いた宗旨もある、夫れ故同じ佛教を奉ずる者でも、水火の争をして居る者がある、之を法華宗と念佛宗と申します、法華が佛にならば、牛の糞が味噌になると嘲ければ、門徒物知らずとて罵る、同じ佛教ならば衝突する筈は無いが、是の通り衝突する處を以て見れば、何ちらか非なる處が無ければならぬ、つまり教主釋尊の御本領を得ぬからで御

座ります、即ち眞實の佛法を傳へぬからである、又た御開山の御語を拜覽するに、行者自身のために佛法を修すと念ふべからず、名利のために佛法を修すべからず、果報を得んがために佛法を修すべからず、靈驗を得んがために佛法を修すべからず、但た佛法のために佛法を修す、乃ち是れ道なり、

と仰せられてある、誠に佛海中の羅針盤にして、難有き御語で御座ります、是れまでの佛法と云ふ中には、即身成佛で、身より光りでも放つ様な佛の果報を求めやうとして信ずる者がある、或は靈驗を得やうとして頻りに御祈禱するのを佛法ぢやと思つて居る者がある、いかにも是等も佛法には違ひないが、併し一分の佛法にしてこれ等は決して誠の佛法と云ふことは出来ぬ、それから僧侶となりて僧都ぢやの僧正ぢやのといふ僧官を望み、槍薙刀をひらめかし、威勢を望まんために佛教を修むる者があつた、今日でも僧侶の肩書の僧都僧正を書いて、誇り顔なる者もある、幾等僧都と書いて見た處で、惠心僧都の徳もあるまい、僧正はよいが、昔しの遍昭僧正にも及ぶまい、或は僧徳を輝かすに官位を借りて輝かさうとして伯爵だの侯爵だのと昇級の運動をして居る

者もあるが、昔しも斯る者があつたから御開山様が御覽遊ばされ、血の涙を流して御慨き遊ばした、是が佛法なら、佛法ほど世に恐ろしき悪法はあるまい、併しそれ所がまだ肝心の佛法に瑕玼を付けて仕舞うた者がある、夫れを御開山の御語に、  
今世流布の法は、此れ乃ち釋迦大師無量劫來難行苦行して然る後に乃ち此法を得るなり、本源既に爾なり、流派豈に易かるべけんや、好道の士は易行に志すこと莫れ若し易行を求めば、定んで實地に達せず、必ず寶所に到らざらん者か、  
と仰せられて、他宗の者か強て自力難行と他力易行と名け世人を迷はしてしまつた、元來佛法は自他の範圍を離れた者ぢや、自他は時に隨ふて無窮である、又た難行易行と云ふが、法に難易はない、其人に難易があるのぢや、桃の花を見て悟る者もある、五十三人の善知識を訪うた者もある、其れ故に佛法に難易はないのに、難行易行の名目を付けて大切なる戒法まで蔑にし、戒法か守れぬからとて捨て、了ふのは、譬へば盜賊か制しきれぬからと云うて、盜賊を禁ずる法律を解くやうな者ぢや、これがどうして誠の佛法といふことが出来やうぞ、天魔波旬の行にも及ばぬことぢやとて、非

常に御歎き遊ばされた御開山の御語である、次に又た

或は人をして心外の正覺を求めしめ、或は人をして他土の往生を願はしむ、惑亂此れより起り、邪念此を職とす、縦ひ哀樂を與ふと雖、銷方を教へざれば病となること毒を服するよりも甚し、我朝に古より良藥を與ふるの人なきが如く、藥毒を銷するの師未だ在らず、是を以て生病除きがたく、老死何ぞ免れん、

今日日本の佛敎というて居るのは、此の御語の通りで御坐いましやう、無暗に即身成佛をいふ者は蛇にのらくらあるくなど制さんがために、竹の筒に入れおくやうな者ぢや、此世の外に淨土があるやうに思うたり、心の外に佛があるやうに考へたりするから、益々佛法の本領たる轉迷開悟の御趣意に背き、到底誠の佛法を得て涅槃の悟りを開くことは思ひもよらぬことである、矧て世のためになる様な信者などは迎も出来るはずがない、試に御覽なさい、法華宗の信者を加藤清正とすれば、淨土門の信者は熊谷直實である、禪宗の信者は澤山あるが、就中楠正成公の如きは、其白眉である、各々信ずる所の宗旨によりて自ら其人の品性が分ります、加藤清正は武勇一方の士で

ある、自ら法華宗の氣風がある、熊谷直實は他力往生で育て擧げられたから隱遁者の氣風がある、楠公は自ら大度量の氣風が見ゆる、此世ばかりかは、七たび生れ代り來て、朝廷の御爲めに力を盡さうとさるゝ、實に世益になるのは眞實の佛法を傳へた禪宗であります、此の楠家三代のみならず、北條泰時、時頼、時宗、細川頼之、太田道灌、芭蕉翁、武田信玄、上杉謙信等又唐土では蘇東波、司馬溫公、白樂天等いづれも名士が多い、これが眞實の佛法であるからぢや、去ればこれから此の眞實の佛法を御傳へになりた承陽大師様が、大疑問を抱かせられて、入宋參禪悟道遊ばせられ、御歸國の上、眞實の佛法を御弘め遊ばしたと云ふ御話を致したいと思ひます、諸て以上で類似佛法と眞實佛法との大畧を粗と辯じて置きました、これより彌々大師の此の佛法に一大疑問を起させ玉ひ、宋朝に於て悟道の上御歸朝遊ばされ眞實の佛法弘通の御事柄を摘んで申しあげましやう、大師十五歳の御時一切藏經を御覽なされると、華嚴經の中に本來本法性、天然自性身といふ御語がある、心は本來吾人は生れたま、このまゝ佛であるぞとのとであるが、そこで若し此身此のまゝか佛であるならば、何故に諸

佛がたは發心したり修行をしたりして居らるやどの御疑問があらります、此の御疑問は實に佛法の基礎である、此の處に目を付けなければ、佛法を見る眼はないのであるそこで叡山の一山三千坊の僧侶に御尋ねなすつたが、一人も答ふる者はない、遂に叔父良觀法眼の御指圖によりて三井寺の公胤僧正に御尋ねがあつた、公胤僧正は天台宗當時の學匠である、僧正の御答には此の義宗義ありと雖、恐くは意を盡さしらん、須らく建仁寺の榮西に尋ねべしとのこと、それより建仁寺の榮西禪師に此の義を御尋ねになりました、禪師の御答には三世の諸佛あることを知らず、狸奴白狐却つて有ることを知るその御答ぢや、諸佛は唯だ法性のまゝに起居動靜し玉ふが故に日々の作業は皆な法性の動靜となり來る、凡夫は三毒のために法性を暗まされ居るから、日々の事業は皆な罪過ばかりであるとの御化導ぢや、然るに大師様には畧々これにて其大意を御明らかになつたけれ共、極意に至りては御肯ひがない、夫れより廿四歳の御時、宋朝に御渡り遊され、天童山に於て大悟を御開きなされ、御歸朝ののち西京の興聖寺に於て始めて御說法があつた、其時の御語に、

只是等閑に天童先師に見えて當下に眼橫鼻直なることを認得して人に瞞せられず、便ち空手にして郷に還る、故に一毫も佛法なし、日は朝々東より出つ、月は夜々西に沈む、

私は、佛法を求めやうとして宋朝に渡つたが、如淨禪師に見えて眼は横に付て居り、鼻は豎に付て居ると云ふことだけ認めて來たから、空手で歸つて來たのぢや、秘密の法だとか、止觀だとか、他力往生だとか有り難さうな者は一つも持ては來ぬぞ、それだから佛法は少しもないぞ、日輪は毎朝く東方から頼みもせぬに現れて居る、月輪は毎夜く現はれて、世話だとも苦勞だとも思はずに西の方に沈み入るばかりぢやぞと仰せられた、何んと皆様これが佛法の眞面目であります、否な宇宙の眞相であります、此の處に淨土がありますか、地獄がありますか、佛がありますか、凡夫がありますか、此の境界に入りて見れば、淨土も地獄も見ることが出來ぬ、佛も凡夫も見ることが出來ぬ、譬へば富士山を見やうとするには、山の頂の上空から眺めれば見えぬ、地獄淨土の沙汰をして居る間は眞實の佛法ではない、味噌の味噌くさきは上味噌



に非ず、眼の前に佛の姿や凡夫の姿が顯れ居るうちは、眞實の佛法を會得した者といへぬ、それで御開山の御傳になりましたる佛法は御手本離れをした佛法で、其の他の佛法は御手本離れをせぬ佛法である。王義之の御手本がよいからとて、御手本を擔ぎ廻り居る様なことでは書家とはいへぬ、御手本離れをして自由自在に書かなければ書家の用をしませぬ、たどひいかなる上味食物でも、胃袋に滯つて居ては滋養にはならぬ、消化さなければ、役に立たぬ、御開山の佛法は消化して滋養になる佛法で、他の佛法は不消化物で、滋養にならぬ佛法である、否事によると、非常な害毒になることもあります、言はゞ御開山様の佛法は時間空間物質道理精神の上に超然として立て居る佛法である、實に本宗の佛法には言外に意味ある眞理の妙術が傳り來つてある、私しが今一口に掻い摘んで本教と他教とを比較して申しましやうならば、他宗にては穢土を遠離し淨土を欣求すと立てますが、本教にては生死として厭ふべきなく、涅槃として欣ぶべきなしと教へます、厭はず欣はずとは妙味の有る處です、他宗にては此の娑婆世界より極樂若しくは兜率天などに往生せよと立てますが、本教にては淨土より娑婆に來た我々ちやから此の生は度衆生の生で、此の死は度衆生の死と教へます、又、他宗にては修行して而る後に佛に成ると立るが、本教は證上の修なるが故に、修行のまゝが即ち證得じやと教へます、又、他宗にては自力他力を立てますが、本教は自力に非ず、他力に非ず、感應道交と教へます、例へば親鸞上人の歌に「唱ふれば我も佛も無かりけり、なむあみだ佛の聲ばかりして」とありますが、此歌は全く他力の歌であるが、大師は「唱ふれば我も佛も無かりけりなむあみだぶつ〜」此の歌の如きは自力他力の上に立つた絶對的の、至極難有いお歌で御座ります、

これは二三の例を擧げたいけてすか、詳しいことは第五回目に於て委細述べまじやうそこで此の通り高尙にして而も實用になりまして少しも架空のことは無い、故に昔しより和漢の名士が多く本宗の信者となる次第であります、それに又た佛祖正傳の御系圖の正しいことに至りては、逆も他の宗派には類の無いこととて御座ります、私は今ま眞言宗と眞宗と日蓮宗だけの系圖を擧げ、本宗の系圖と比較して申しあげまじやう、全體佛法で尊ぶ者は面授口訣であります、面授口訣は系圖の嫡傳による、嫡傳の系圖

が正しからざれば面授口訣も不正である、其口訣が不正なれば誠の佛法は傳へられませぬ、そこで系圖を尊ぶ次第であります、偕てまづ眞言宗のを見ますと、之には付法の八祖と、傳教の八祖との二つがあります、

●付法八祖、大日如來—金剛薩埵—龍猛(龍樹)—龍智—金剛智—不空—惠果—空海

●傳持八祖、龍猛—龍智—金剛智—善無畏—不空—一行—惠果—空海

又淨土眞宗の七祖は左の通りであります、

●龍樹—天親—曇鸞—道綽—善導—源信—源空—親鸞

次に日蓮宗の相承を挙げますと、

●外相承、本師釋迦牟尼佛(迹門)—迹化藥王菩薩(天竺)—授職灌頂—日

蓮大菩薩(末法)—授職灌頂

●内相承、本師釋迦牟尼佛(本門)—本化上行菩薩(天竺)—授職灌頂—日

蓮大菩薩(日本)—授職灌頂

この通りで、弘法大師が印度に入つたのでもなければ、親鸞上人も日蓮上人も入唐し

た人でもなし、龍樹菩薩が大日如來に御目にかゝりたこともなければ、龍樹と天親との間は年代隔りて居り、七祖八祖位では到底二千餘年を経て、日本まで傳はる筈はない、即ち面授口訣を缺て居る、それ故ドウも眞實の佛法とは云へぬ、つまり弘法、親鸞、日蓮等の佛法は一部の佛法にして、佛法の本領を傳へぬから、勿論正統の系圖といふ者はない、といのつまり、夢で傳へたとか、幻で傳へたとか云ふことになる、然るに御開山承陽大師は釋尊より五十一代の法脈を傳へて居らせられ、現に我々までも嫡々相承の法脈を持て居ります、是の系圖の正しい點に至りては、世界各宗教中、本宗だけで御坐います、例へば日本の天子様は神代よりの御系圖を持て入らせらるゝ、恐れながら百二十一代は、今上で入らせらるゝ、これは萬國に比類ないから「天佑を保全せる萬世一系の天皇陛下」と申しあげますが我宗の承陽大師も、亦其の如く御系圖正しく入らせらるゝから、本宗は佛教の總府即ち佛教の本家筋、他門は我宗の分家である、去れば本宗の御開山は日本の御釋迦様である、故に俗人でも具眼の者は違ふ所があつて、安井息軒と云ふ人は、「道元は釋迦の本領を得たる者なり」と云れた、指月

和尙の『荒田隨筆』には六祖已上の道と稱して居られる、正風の祖芭蕉翁の『奥の細道』と稱する紀行文には「五十丁山に入りて永平寺を禮す、道元禪師の御寺なり、邦畿千里を避けてかゝる山陰に跡をのこし玉ふも、貴きゆゑありとかや」と記して其遺徳を追慕せられてある、又八事山諦忍律師も御開山を評して云はるゝには「諸宗の祖師として餘りある者は唯永平高祖一人のみ」と、又眞言宗の大徳の撰ばられし『萬年草』にも「愚かなる我は佛にならずとも、衆生を度する僧の身なれば」といへる和歌をのせて評せらるゝには「法幢を高く法界の頂にたてし、宗風を千載の下に振ひ玉ふ蹤跡實に感ずるに堪へたり」と、賞讃せられたことがあつた、然るに御互が何等の好縁でかゝる尊き御開山の御弟子となり、間違のない、正しき佛法を聽聞し、剩へ正しい御系圖の下に列なることの出來たのであるが實に有難き次第で、今は新領土臺灣までも御法の弘通するのみならず、六百五十回忌の御遠忌にまで遣ひ奉るはよくの好因縁ぞと思へば感涙のほかはありませぬ、

### 第二 意氣豪邁に渡らせ玉ひし御徳

前節には、眞實の佛法を弘通し玉へる承陽大師様の御徳を述べましたが、このたびは御開山の意氣豪邁に渡らせ玉ひし御徳をかい摘んで申し述べまじやう、全勝荷も一宗の祖師と仰がるゝ位の方、皆いつれも御氣象豪邁に入らせらるゝは勿論のこと、日蓮上人が佛法を國家の上に布演したのが忌諱に觸れて、幾回の災難にあはれしにも屈せず、あくまで素志を貫徹せられたのは、氣象が豪邁で入らせられたからの事である、親鸞上人が弘教せられし當時、遠島流罪の刑に處せられても屈し玉はざりしは、是亦氣象豪邁であらせらるゝからの事、さりながら日蓮、親鸞の兩上人は國內かざりの運動であるが、我が承陽大師様が航海不便の當時、外國に於て、而も天子を敵手として法の正邪を正された御氣象に至りては、古今其ためしを見ざる處である、いざや此事を述べまじやう、御開山様僅か二十四歳の御齡を以て、清華の御身分で、遙るくと萬里の波濤をこぎわけ、支那の寧波府に御上陸遊ばして、天童山に御掛錫あらせられたが、此の時僧臘の紊亂は一方ならぬ有様であつた、僧臘とはすべて先きに

持戒せし者は先きに坐るので、後とに持戒せし者は、年の老幼と、身分の貴賤と國の大小とを問はず、必ず後に坐るのである、即ち僧侶の位は持戒の前後によりて定まるので、これは如來様の御定めになりたのであるから、至つて大切な事である然るに天童山ども云はるゝ大寺院の僧階は外國の人とさへいへば、貴きも老ひたるも、皆な後に列べる弊がある、全體支那人は尊大の氣風があつて、自分の國を中華と申し、あどはいかほど善い國がありましたも、東夷南蠻西戎北狄と名けて、皆な野蠻國と見なし、て仕舞ふ、明朝が十七代で顛覆したのも、尊大の自惚が強いため、滿州を野蠻だと云つて侮つたために、愛親覺羅のために亡されて仕舞たのであります、此の風が僧俗共に行はれてある、メコテ御開山様を、日本は東夷だと云ふので、侮りましてズツとあどの方に配列しました、御開山は之を見て憤然として御嘆き遊ばした、佛法は同一の佛法で、縦ひ國に東西の區別あるも佛法に東西の差別はない、然るに日本で戒法を受けた日本人であるからとて、先きに受戒して居るにもかゝらず支那人の持戒者のあどに置くは何事ぞ、國の東西を以て佛法を傷るとがあるからとて、其非を御正し遊ば

したが、例の自尊なる支那人のとであるから、日本人が何をぬかしをるとして、誰もあしらふ者か無かつたので遂に御開山は宋朝の天子に上表して訴べられました、時の天子は寧宗皇帝で御坐ります、これまで入唐された方々に、弘法大師、傳教大師、慈覺大師、榮西禪師と云ふ歴々の御方が入唐されましたも、矢張り日本人のゆゑを以てあどの方に配列せられて甘んじて居られたと云ふ事です、夫れは止む事を得ませぬ、其當時は支那崇拜で、恰ど今日の日本人が西洋のことを尊むと同じことで、唯々諸々というて居たのであるが、御開山様は支那の盛んなる文物に沈醉する様な方ではありません、國のために肝心の佛法の位階を曲る様なことではならぬと云ふので遂に上表に及ばれました、皆様、勿躰なくも村上天皇九代の御末裔で入らせられて、僅か御年二十四歳で此の御氣象があらせらるゝとは、恐れ入るほかは御坐いませぬ、これも皆末世の我等も互を救はんどの大慈悲心でござります、其上表の文と申しますのは

佛は西天に興りて毗尼を以て洪範をなす、法東域に流れて僧臘を序で階差を分つ、前古依り承る、今に至て何ぞ廢せん、伏して以れば皇朝聖詔宸慈博通、靈山の囑言を忘れず、漢庭の幸行を慕ふことを願ふ、恩を

垂れ僧次を質して授戒の先後愆らなく、旨を頌て亂階を治め、法臘の短長を以て別たし、外客等に天淨に沐し、下情野詢を悉さす、

斯の通り上表されましても、例の優柔不斷なる支那根性、遂に御流れにならうとする其時、重ねて止表遊ばした、其御詞に、

重ねて申す佛法沙界に徧く、戒光十方を照らす、況や經に曰く此の三界は皆是れ我が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なりと、皆是れ我有を以て言はし、此の娑婆世界は釋迦牟尼佛の國土なり、國已に佛國、人は皆佛子なり、次第天倫温清すべからず、伏して以れば佛法世法、理のよりに是れ従ふ、天神地祇非理を容れず、理或は違せずんば、恐くは是れ亂邦の賢者亂邦に居らず、眞人は奸匪を避く、佛家の臘次若的當ならずんば、王室の憲綱安を明晰たらん、幸に中華の聖徳を仰ぐ、爰に倭僧の鄙陋を陳ふ天裁胡ぞ私あらん、謹て乞ふ戒次を正せ、

即ち御開山様の御思召は、佛法といふ者は世界のあらゆる處に充て居る、佛法のある處は、戒法のある處ぢや、戒法のあるかぎりには戒臘の順序を正しくせねばならぬ、戒臘の正しいのは戒法が正しいからぢや、戒法のある處は眞實の佛法が行はれて居るので、此の間に支那だ、天竺だといふたてわけは見ぬ筈である、如來様の仰せらるゝに

は、今此の三界は吾が領分であるぞ、其三界の中に生とし生ける者は吾子であるぞ、三界とは、欲のある世界も、有形世界も、無形世界の者も、皆な我支配の下で其衆生は吾子供ぢや、他人ではないぞとの仰である、そこで佛法も世間の法も道理で立て居るので、道理が亂るゝときは國家は亂れる、國家亂るゝときは賢者は居らず、天神地祇は其國を守らず、奸人ばらが跋扈する、それでどうして皇室の安寧を持つことが出来やうぞとの御旨意である、然るに寧宗皇帝この御上表を御覽ありて、いたく御敏感あらせられ、勅を下して此の弊害を御改めなされ、是より御開山の御名前は四百餘州に響き渡りたといふことです、皆様如何でございます、これまで各宗の高僧方が交々入唐なされたけれ共、矢張此弊害のある戒臘の下に立て止むを得ず甘じて居られたのを御開山は僅か御齡廿四歳にして、御入宗遊ばしてからまだ、日も立ぬに四百餘州の大主たる皇帝に對し、佛教の改良を御訴になり、遂に年來の悪き陋習を御改良遊ばし、後世の大模範を御示しになりたは、承陽大師様より外にありません、これが決して世に名譽を銜はんがためではない、利得を求むるためではない、實に是れ一切の

衆生、取りわけ我が日本に眞實の佛法を廣め助け救はんどの御慈悲より外はないので御坐ります、斯る豪邁の御祖師方は、歴史で拜見してさへも、何となく慕はしいとであるのに、吾等は何等の好因縁か、其御教を受ける曹洞宗の信者となり、剩へ五十年目に一度しかない六百五十年の御遠忌に遇ひ奉ることの出来るは、よくく好因縁で御坐ります、然れば我等現當二世に於て、眞實の佛法を戴き、六道輪廻の羈絆をたつことが出来た大悲の御恩を報い奉るは、此時ぞと思へば、身を粉にしても酬ひ奉らねばなりませぬ

### 第二 深く名利を厭はせ玉ひし御徳

前回に於ては御開山には苟にも四百餘州の帝王たる寧宗皇帝を相手取り、僧階の改更を遊ばした御徳を申述しましたが、這回は深く名聞らしき事や利得の事などは殊更御厭ひ遊ばした御徳を申述せまじやう、元來眞實の佛法と云ふ者は名譽を擧るのが目的でもなく、利得が目的でもなく、人に敬禮さるゝためにするでもないのである、名譽や利得や、敬禮を得んがために佛道に入るならばつまり名利の奴隸となるのである、も

とよ名譽や利得や敬禮と云ふ者は夫れ丈の徳行さへあるなれば、求めなくとも得らるゝ者です、西洋の諺にも『名譽は徳行の給金』とあります、正しい道に依りて運動する者ならば、利益や名譽を標準とせずとも、自ら日用の行持に名譽の花咲き利益は求めずとも損する様のことばかりませぬ、况や國によりて異なる人爵が目の前にちらつく様では、進む宇宙の大道と共に運動することが出来ませぬ、此様なとではどうして大丈夫といふことが出来まじやうぞ、殊更僧家の身などは、超然として社會の範圍に入れらるゝものではない、然るに僧家の身でありながら、兎角人爵に目を付ける者が多いのは、誠に慨はしいとござります、彼の傳教弘法の大徳にして國王大臣に接近し玉ひ、天台眞言の兩宗は貴族の宗脈らしくなりしは名利の臭氣なしとはいはれませぬ、日本禪門の第一祖とも云はるゝ臨濟の榮西禪師の智識ですら、僧官を求められたのを見ますれば、當時の佛家中にも人爵を希ふものあつたとが想ひやうとであります、東鑑と云ふ書籍にかういふことがあります、

建保元年六月二日法福寺の長老榮西、京都より参詣す、日來望まると所の大師院、同く三日議定に在り、存

生の大御流の事、先蹤なきに依て、同四日權僧正に任ぜらる、  
とあります、榮西禪師は御開山様の日本での師匠様でありました、斯の如き大徳の方  
ですら官位を望まらるゝ、實に離れがたきは名利の念であります、併しよく考へて見れ  
ばつまり名利を願ふ人は、己に足らざる所があるからでございませう、然るに御開山様  
には御歸朝の後、深草に御閑居遊ばさるゝも、參禪問法の者多く、遂に一の禪寺が立  
てられました、それより京都の貴顯方も々々と詰めかけて、車や馬の集ること雲の  
如く、それで御開山の思召は國王大臣に接近する様では我本懐ではないと仰せられ、  
遂に越前の山奥に越路の雪を踏みわけて椽や、推の實を食物となし王ひ、猿や鹿を朋  
となして、雲深き處に御入り遊ばしたるが、時の帝、後嵯峨天皇の御耳に達し、御名前  
を佛法禪師と賜はり、紫色の御召を賜はりましたが、固く御辭退申あげて、高閣とて  
高殿に收め、生涯の間御召し遊ばされなれどいふことでもございませう、其時天皇に奉  
りました御辭退の詩があります、

永平雖ニ谷淺。勅命重々々。却被猿鶴笑。紫衣一老翁。

思召は私が薄徳淺學の者ぢやけれ共、天皇の御恩徳の御思召は重う御坐ります、いか  
でか違背致しましやう、乍去若し仰せに従ひ、コナ山深き谷底に居る者が立派な衣  
を着て居りましたなら、平生猿や鶴などを相手にして居りますから、此の輩に身装が  
オカシイとて笑はれまじやうほどに、御辭退申し上げます、幾等立派な冠を着けた  
處が、猿は猿丈でありませう、あの鶴を御覽なさい、九天雲浄うして鶴の飛ぶ事高し、  
彼等は別に位も付けられませぬけれ共、どこに居ても鶴の徳を損じませぬ、私し如き  
者が御恩賜の衣などを着ますと、猿が冠りを付けた様で醜うござりまするとの思召  
である、されば、生涯の間御衣は黒色の御衣で、御袈裟は金襴や綾錦はあつけ遊ばさ  
れなれど云ふことです、此の潔白にして氣高き御道徳は、實に今日の我等をして慚  
死せしむる斗りである、御一同様には禪宗の歴史を御覽なさい、古より僧家の身とし  
て、縦ひ末世に到るも、天台や一向宗のやうに戦争をしたことはいない、都て俳諧の中  
興の祖師たる芭蕉や、茶の湯の中興の千の利休や、兆殿司や、雪舟雪村の氣高き人々  
は皆禪門より出でられたのです、今や日本は文明の世に進みましても、それは有形上

のこと丈で、精神上の徳義は丸で廢れて居ります、立派な學士博士の稱號ある人々にして人間の目的は保命主義、即ち生きて居るのが目的である、名譽のために運動する利得のために運動すると云ふことを、恬として耻ぢず言はるゝに至りては、如何に徳義の廢れたるかは想ひやらるゝことです、然るに今の世の中に徳義の標準として尊重すべきは御開山承陽大師様の御徳で、一點の間然する處なき、御徳を備へさせられたは、御開山承陽大師様であります、之に就けても御恩報謝の稱名南無釋迦牟尼佛と悦ばるゝが、何よりの肝要、

第四 各宗の高僧等多く大師に参禪し玉へる御徳

前きには大師様には深く名利を御厭ひなされし御徳を述べましたが、今回は御徳高きために各宗の高僧方まで交々大師に参禪し玉へることを述べやうと思ひます、世の人は法然親鸞の兩上人は念佛停止の令に逢ふて、遠島申し付けられた、其れにも係らず、是皆な我一化の幸なりと悦ばれ、或は師の御徳なりとて感ぜられしといひ、或は題目停止に逢うた日達上人が幾回か災難に逢ひ玉ひしも、遂に御主義を貫徹し玉へるを尤

いと云ひますが、それは尤いに違ひはないけれ共、幾分の御徳にして、萬全の御徳とは申されませぬ、夫れは國王大臣までも感化する丈の御徳がないからであります、國王大臣までも感化するほどの御徳がありましたなら、いかでか存やうのことがありましやうぞ、然るに我が御開山承陽大師様は公武を論せず、官民を問はず、御歸依を申しあげましたから、一分一點も他の譏謗を受け玉ひしことをききませぬ、實に内外玲瓏たる明玉の如き御徳で入らせられます、夫れゆゑに各宗の高僧方までも御開山様に佛法の極意を御尋ねになり、或は御弟子になりた方さへ鮮からぬほど御坐います、先づ由良の法燈國師には弟子の禮を御取りになりました『法燈國師年譜』を見ますると、かやうにございます

仁治三壬寅年、師卅六歳、城南の深草極樂寺の元和尙に依りて菩薩戒を受く、元入宋の時、天童淨和尙に従ひ相傳の血脈なり、元は乃ち永平開山佛法上人なり、

と出て居ります、次には淨土宗の鎌倉光明寺の開山然阿土人でありませぬ、『高僧傳』巻十五にはかやうにかいであります、



鎌倉光明寺の開山然阿上人良忠は、法然房の弟子なり、永平寺の道元に参し教外の法を問ふ、

と出て居ります、次きは日蓮上人であります、上人の年譜には、

曹洞の道元宋より歸つて宗を都下に唱ふ、大士往て其道を問ふ、

とござります、其次は親鸞上人でござります、上人の俊光院に贈るの書には、かやうに出て居ります、

此間深草の佛法房に参し、實相一如の妙を了得する故、動化の趣き面白く、まことに覺え候、夫れ佛法は鳥の空に行くが如く四相を離れ有無を脱するを、法に信心の人には申候、少もかぎりあるは鳥必籠中に入事に候、能々實相の妙跡に歸入致さるべく候、実賢々々、

去れば東京淺草報恩寺に安置する親鸞上人の像には拂子を持せられて居ります、是は我御開山のお授けになつたのであるときいて居ります、此の通り日蓮親鸞の兩上人始めとして大師様に御歸依を申しあげた處を見れば、先づは各宗祖中の高僧ぞ申しあげてもよからうと思ひます、而して親鸞上人には餘程御開山と御道交の深かりしと見え親鸞上人の遺言を見ますと、かう云ふとがあります此文章は東京淺草報恩寺代々相傳の要文五ヶ條となり居ることは、『明教新誌』第千五百四十二號に見えてあります

傳の要文五ヶ條となり居ることは、『明教新誌』第千五百四十二號に見えてあります

一に我宗に自力を捨て他力を求めよ云ふは、人々貪瞋痴の三毒に引かると剛強の自力を捨て無明煩惱にも礙されず、明々たる本心に本づくを云ふなり、其故は只今まで業力に引かると自力を除滅し始めて眞如實相に趣くに依て自力を捨て他力の信を求むるの法なり、假りに教所の方便を頼みて心を寄するの力にして、稱名念佛を所作として参詣供養を行せば、永劫を経ることも佛果に至ること離るべし、相がまへて佛は遠きにあらざ心に立ち歸りて勤むべきことなり、

二に一向一心の宗旨なりとて他法をば耳をそばめ、我が法を偏頗すること眞に愚癡の至りなり、是の如く行せば後世來世は猪ておき、先づ今世にて世の交りもせまく、人々に隔てられ、法に縛せらるゝなり、一向一心と云は、生死善惡を離れ、神通奇特にも心をよせず、自他無差別を一向一心と云ふなり、只一向一心におもむけよ云ふにはあらず、悪しく心得て深坑に落ちよ、眞に淺間敷次第なり、

三に我心を唱へ返して散亂を止むるなり、是の如き念佛修行する人は情識も盡し淨め、定んで心期かなり、

四に常々阿彌陀佛を唱へて往生を願へども、阿彌陀は我が心の異名なり、然らば淨土にして心願かなり、歌に唱ふれば「佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛の聲はかりして」此聲の主は誰やらんぞ自知せよ、

五に雜行を止めよ云ふは、愚痴の凡夫は萬行をさしなきて只阿彌陀の名號を一片に志し深ければ、必ず極樂

淨土に生るゝこと疑ひなしと教へて彼の慈を其儘にして、佛道誘引の謀をも爲さんためなり、亦信心のある人の爲めに云只我心を明むるの外は難行なり、是を捨てよと教ふるなり、歌に曰く「今よりは後世のつとめもせさ」及び阿阇梨の「字のあるにまひせて」我宗は塵に交り菩薩衆生結縁の爲めに男女凡俗を席を隔うして、柔和を以て衆生をなづけ、慈悲を以て行さするを根本とせり、此外別に志を存せば如來の本願にもれ永く此生を異へるを替ゆへきものなり、穴賢々々、

鳥の死なんとする其聲や悲し、人の死なんする其言ふや善し、親鸞上人の未後に臨んでの遺言であれば、兼ての本懐寧ろ主義目的を眞實に發表された様である、此の主義目的は「相かまへて佛は遠きに非ず、心に立ち歸りて勤むべき」といひ、或は阿彌陀とは我心の異名なり」といふに至りては今日世に行はれてある眞宗とは雲泥の違ひである、どう見ても禪宗の安心のやうに見受けます、御開山の御文章にかういふ事がありません、

いごふことなく、したふことなく、このときはじめて佛の心に入る、但し心をもてはかることなかれ、言葉をもていふこと勿れ、只我身をも心をもはなちわすれて、佛の家になげいれて、佛の方より行はれて、これに隨ひてゆくとき、力をも入れず、

心をも費さずして生死を離れ、佛となる、

とござります、彌陀の本願でなければ、外の宗門では助からぬやうに言うたり、禪宗には御安心のないやうに云うたり、或は自力他力を我物らしく云うたりするのを佛法のやうに思ひ、甚だしきに至りては御開山承陽大師様が斯くまで八家九宗の祖師方の御師匠様であることも知らずに居るとは、實に淺間敷かざりてござります、實に謙忍律師の「諸宗の祖師として餘りある者は只永平高祖一人のみ」との評の如くであります、我等御互が斯の如き御開山の尊とき御流を汲み、あくまで法雨に浴するとは何んたる果報ぞと感涙を流し、以て御恩徳に酬い奉らねばなりません、

### 第五 佛教中の大難問を開示し玉へる御徳

前回は各宗の高僧方が、多く御開山様の御弟子になり玉ひし御徳を述べましたが、這回は御開山には佛教中解しがたき大難問を一一御開示遊はし、我等の迷を醒まし、眞實の佛法を御傳へになりしことを述べます、皆様、佛法を如何御覽なりますか、佛様には光明と云ふがありて、東方萬八千土を照さつしやるとか、或は西方に極樂といふ

國が有りて、十萬億土の里程があるとか、八大地獄があるとか、六神通といふ者がありて、飛行自在ぢやとか、随分普通の智識にては解し難いことが澤山ございませう、けれども、是等は決して佛法ではない、是等に就いて種々の妄想を逞うするは、つまり佛法の本領を得ず、佛法の使用法を知らぬからである、昔し、奥州の鬼頭と云ふ所を代官が巡視された所が、なにがさて、未開の地のととて、松樹を焚いて燈の代りにされたのであるから、代官も、堪へ切れぬので、油煙の爲にくすばつて御飯などが食べられたものではない、そこで、代官様は『近頃町方に蠟燭と云ふ重寶なものがあるから御飯の時は、蠟燭で飯を食はして呉れ』と云はれたので、百姓共は買うて来て見れば、如何にも甘さうな、而かも脂肪分がありさうで、これは定めし田樂にして喰ふのであらう、其證據には蠟燭の尻に穴がある、是れは申をさすためじやとそこで味噌を塗り、火にかけし處、油がしたる、香は紛々、御代官様ちふ者は大層甘い物をたべるだんべい、ちやく、油がなくなるさうなと云つて、僅に燃え残りのしんだけを取りて皿に盛りて上げたといふことです、是は昔しの開けぬ時の話ぢやが、今日にても

石鹼の使用方を知らずして削つて使うて居た者を見受けたことがある、或は石油を西洋酒と心得、香だ者もあると聞き及びました、何人でも使用法を知らぬと、コンナ錯りが多い、恰ど佛法の使用法を知らぬと此の類が多いことです、昔し儒者が極樂といふは恐らくは地名ならん、未だ其處を詳かにせずと云はれたと云ふことです、彌陀經や法華經だけを以て開いた日本の祖師方も憚りながら、我教外別傳の宗門から詠めますると、佛法の使用法を御承知が無かつたのである、それ故一佛法も四分五裂して仕舞ましたので、私は之を藥と病とに譬へて辨じましやうなれば、佛法は藥にして、衆生は心の病人、佛菩薩祖師方は御醫者さんである、それで、種々な病人があるから、御醫者さんが種々な藥を調合して、病人にあてがふやうなもので、それ／＼區別はあります、佛敎で、多數の衆生を導く爲に用ひます所の法門の工合も、亦其通りでございます、彼の釋尊が韋提希夫人と云ふ印度の奥方の爲に念佛觀を説かれて其病根を絶たれ、或は不淨觀、或は慈悲觀、或は因緣觀、或は數息觀と云ふやうに、種々の御配劑がありました、佛敎も中々解釋し悪いとであります、從來の御宗旨を弘められ

た祖師方は、各々其一部を取つて自ら安んじ、一經一論に僻して居られるが、其全軀を引括つた佛様の御正意は何處にあるのであらうかと云ふとが、まづ我々の知らねばならぬ問題でございませう、全軀之に就ては、種々な議論もありまして彌陀の一教のみが御本意であると云ふ宗旨もあり、又は法華經が御本意であると云ふ宗旨もあり、日蓮宗などは、實に非常な見識を以て、是非共法華の一經でなければ、佛教は滅びて了ふと云ふ程に一生懸命に論じて居りますが、開明の世には、最も公平にして、最も進歩したる宗教が一番適當して居ると云ふとは、何人も争はれぬ所であつて、偏頗極まる宗旨などが、一時の愚民を誑したやうな口調で、未長く其教を敷くと云ふとは、出來難いものである。で、彌陀佛を一本尊とする宗旨や、法華經を大事とする宗旨は、如何程上手に説明しをしましても、永く識者の歡迎を受けると云ふとは出來難いのである、其他、一種不思議なる大日教などの、偏頗極まる宗旨は、到底、日本の如き、人民の智識の純良にして、理非の鑑別に敏き國民の間に布教し得らるべきものではない況んや、一方向きの片偏頗な佛法を見て、眞實の佛法を忘るゝ如き輩は、飽くまでも

斥けて、正眞正當の佛の御本意を傳ふるのが肝要である、そこで、我御開山様は、其偏頗なる御考へを悉皆振り捨て、眞實佛様の御正意を傳へんために、御苦勞遊ばされ、或時

荒磯の波もえよせぬ高岩にかきもつくべき法ならばこそ

と咏みになりました、眞實の佛法は、ソナ澤山能書を並べて、無茶苦茶に偏頗な説を吐くやうな者の知る所ではない、實に尊むべき、窺ひ難き教であるぞとの仰せであるが、猶ほ又、或時の御化導にも、左の如きと辭かございませう、之を讀みますると彼の念佛行者などが眞實の佛法を會するとの出來ぬとが、解るでございませう、一寸御讀み申しますれば、

オロカ二千萬誦ノ口業ヲ頻リニシテ佛道ニイタラントスルハナホ是レ轅ヲ北ニシテ越ニ向ントオモハンカコトシ、ソレ醫方ヲスル人ノ合藥ヲヌスレ、ナニノ益カアラ

ン、と仰せられて有ります、眞實の佛法を得ざるに依りて茲に佛法の要領を得られない、

要領を得られぬに依りて領解しかぬる、つまり難問の生ずる所以であります、そこで其の解らぬ所の人等に解らせたい爲に、元來文字などでは書き盡せない、貴い佛様の御正意を、態々一步下して、御筆に移させられ、九十五帖の書籍にして御現し下された、之が『正法眼藏』と申しまして、實に本宗の寶とも云ふべき貴い書籍であるが其の生料を書き扱いたものが、『修證義』と申して、今日諸君の御讀みなさるやうになつて居ります、此御著述は、實に我が御開山様の、大なる御徳で、佛法眞實の様子は、之が爲に判然と解つたと申しても可い位である、諸君も、『修證義』だけなりとも御覽になれば解りますが、一度之を見ますと、申すも恐れ多いとではありますが、一字一句も、他の宗派のやうに偏頗などは言ひ玉はず、偏に佛様の御志をソツクリ其儘傳へなされた御苦勞の跡があり、と見えまする、若し、此の一卷をお讀みになつたら、彼の一部の經典を最上の寶として居る人々と、我宗の御開山様との見識に、何の位違ふ所があつて、我宗の御開山が、何れ程勝れて居られるかであるかと云ふとが解ります、私は、之を一々申上げる暇がございませぬから、此邊は、諸君の御研究に

お任せ申して置きますが、マツ手短かに我宗と他宗との異なる所を言つて見れば、他宗は、結構なる緻密な機關を持つて居るやうなもので、理屈を謂つたり、種々な御經文を用ひたりして、構造は大層巧みなものである、けれども、其理屈では佛法の眞面目は現れるものではありません、唯、其機械を飾り付けて居るやうなものである、然るに我宗には、ソツナ面倒な機械は無い、不立文字教外別傳と云つて、理屈や御經の中に頭を付き込んで居るやうな宗旨ではない、唯、其得意とする所は、之を運轉する手腕にある、他宗のは機關を据え付けたけのもの、我宗は之を運轉するのであるから、マア機關士の如きものである、死んだ機關も腕の達者な機關士を待つて、始めて活動するものである、五千餘卷の御經文は、我宗の、公平なる偏頗なき、眞の佛法の流通に依つて、始めて、其光を放つのである、假に云つて見れば、餘宗は機關佛法本宗は機關士佛法である、乃で、其の機關佛法と、機關士佛法とに就て、面白い話がある、昔し徳山といふ機關佛法者が金剛經といふ經即ち機關を見付出し、種々手入をして、餘程見事に手入したつもりで自ら周金剛王と稱し、天下に我一人と稱して居

られた、然るに南方に龍潭といふ機關士佛法者が居りて不立文字の宗風を擧揚して居られたのを聞付け、己れ龍潭何ほどの事かある、彼れ一ツ一本きめこんてやらうと云ふので、大風呂敷に金剛經の講釋を澤山入れて其れを擔いで龍潭の門前の餅賣婆々の所に休息せられた、時に婆々の言ふには御前はどこに行かしやる、拙僧は龍潭の魔佛法を打破らんため時々來た周金剛王とて天下に隠れなき者ぢや、所が婆さんせしら笑をして御前それなら一ツ問ふことがある、此の問に答へが出來たら、餅は唯御馳走します、御答が出來なかつたら、支拂ひをして行きなされ、婆さん澤山問ひなさい、何んでも答へるわい、そんなら問ひまじやう、金剛經の中に過去心も得べからず、現存心も得べからず、未來心も得べからずとある、御前どの心を取りなさんと、此の一言に閉口して餅が喉に通らなんだと云ふことです、そこで機關佛法の非なることを悟り、遂に機關士佛法即ち大悟して龍潭の門弟になり、大に眞實の佛法を擧揚せられたと云ふことです、

又昔し法性寺の印宗法師の門下に兩人の僧ありて、法幡を見て争ひをして居られた、一人の僧の云ふには幡が非常に動くワイ、いやさうではない、風が動くのである、いや風が動くではない、幡じや、いや風、いや幡と争ひが絶えませぬ、然るに六祖大師が之を見て氣の毒に思召され、いや幡が動くでもない、風が動くでもない、御前方の心が動くのぢやと申されました、風や幡の動くを見るのは所謂機關佛法で、心が動くを見るは機關士佛法と云ふのであります、皆様、西方に御淨土が見ゆるのも、兜卒天に彌勒菩薩がござる様に見ゆるのも、皆是れ法轉我で、機械佛法であります、心淨ければ淨土も淨し、佛の印相を傳へられたは眞言で、佛の名號を傳へられたは念佛宗で佛の言教を傳へられたは天台で、佛の心を傳へたは本宗であるから、佛法の總府と心得、我が御開山様は、佛様の再來とも申上ぐべき御方で、又、實に、我が日本國には、機械ばかりの佛法ではならぬ、此の佛の御心其儘の宗旨でなければならぬと云ふことをあしし遊ばしたので、高德と云ひ、佛教の大難問を示し玉ひし御見識と云ひ、實に御讚嘆申上ぐるに語なき程の御方であります、されば、我宗は佛法の總府なり、我々は、如來様の菩薩子なりと信じ、御恩報謝の稱名南無釋迦牟尼佛と悦ばるゝが、何より肝要

第六 勤王誠忠に渡らせ玉ひし御徳

前回にては佛教中の大難問を御開示遊ばしました事を述べましたが、今回は勤王御誠忠に入らせられしことを述べましやう、全躰世の人は僧侶と云へば世捨て人で、國家の事などは丸で頓着せぬやうな考を持つ人があるが、仲々さうではない、寧ろ世の人々よりも勤王家が多い、然れども名利を厭はるゝから、表面上の御運動はないのである、御開山の御語に、

○國○家○に○眞○實○の○佛○法○弘○通○す○れ○は○諸○佛○諸○天○ひ○ま○な○く○衛○護○す○る○が○故○に○王○化○太○平○な○り○、○聖○化○  
○太○平○な○れ○ば○佛○法○其○力○を○得○る○者○な○り○、

と仰せられてある、當時北條時頼公は副元帥として鎌倉幕府に於て天下の政權を握つて居られた時に慷慨家として日蓮上人が出で、『立正安國論』を著はして忽必烈の攻め來るべきを唱へ、大に幕府の攻撃を仕はじめたが、是れは御志は感心だが、今日の政黨の仕事のやうで、やり方はまづい、つまり治安妨害と認められましたから、龍口に於て斬罪に處せらるゝ處、大覺禪師の哀願により放免されたといふことで、日蓮上人

が此時に書かれた感謝狀が今日に於ても圓覺寺の寶物となりて居る、是はどうでもよいが、僧侶の運動としては摸範にはなりません、殖産業、開拓業や教育慈善の事業も、僧侶の事業としては適當ぢやが、眞正の正業とは云へぬ副業である、眞正の業とは精神上の感化にある、御開山には精神上的の感化に重きを置かせられたので、御開山の譽は天下に隠れなき爲に、寶治元年時頼公が御開山を鎌倉に招請して御弟子となり、法名を道崇と改め、菩薩の大戒を受けられたといふ事であるが公は既に御弟子になられた位であるから、其幕下は悉く其御教化を受けられた、如何なる御教化を受け如何に感化したかと云ふことは先づ時頼公には巨福山の起願の文にはかういうてあります、  
我子孫能く佛心宗を奉ぜば系胤益昌ならむ、蓋し家門と禪門と盛衰をなさむ、  
如何に我宗に深く歸依せられたかは、是を以て證する事が出来ます、引付衆には剛直にして學識あり、廉潔なる行のありました青砥藤綱を用ひて居られ、滑川に於て一文の錢を落して五十文の人夫賃を拂ひ、節儉の摸範を示されしことがあるのも此時代であります、而して時頼公にはあの天下の執權職なるにも係らず、僧服を着け従者を

も連れず、六十餘州行脚をなされ、實地に人民の疾苦を視察されたと云ふことである、鉢の木といふ謡曲に出てあります、上野國佐野源左衛門尉常世、雪の夜に黒い粟飯を振舞ひ、秘藏の松と梅と櫻の鉢の木を焚て時頼公を温め申しあげた處、後ちに此の事が御褒めになりました、松には上野の松井田、梅には加賀の梅田、櫻には越中の櫻井を、鉢の木の料に宛てられたといふ美談があります、斯の通り實地の視察をされたのであるから、人民が實に恐しかつたので、小供の泣を止むるのに、それ大入道が出る」と云ふは全く時頼公から始まつたことである、又如何に節儉であつたと云ふとは、天下の執權職とも云はるゝほどの人が、一夜來客を饗應するに、生味噌を嘗めながら冷酒を傾けられたといふ一事でも充分にわかります、殊に衣服は麻を用ひ障子はきりばり御位は僅に從五位に止まり、華を衒はずして實を尙ふの方針を以て治められ、實に爲政家の模範とすることが出来る、節儉と公明と簡樸と謙遜との徳は全く北條三代にあつた故に海内は平安に治まつたのである、

長き夜の遠の眠の皆目覺め波のり船の音のよきかな

此の歌は青砥が四海太平無爲の代をよんだ歌で、天下はかくありたき者です、しかも時頼に右やうの大感化を與へしは、誰あらう承陽大師様であります、斯の通り感化するのには教法家の本領であります、精神の感化に大なる力があつたことは之でわかります、そこで御開山様には翌春になり本山に御歸山に相成ります、そこで時頼公には信心肝に銘し、新に大伽藍を建て、請待申上げたけれ共、御受けがなかつた、其大伽藍とは只今の建長寺であります、それで御受けがないゆゑ、玄明首座を以て御本山に三千石の寺領を御寄附になりましたが、當に之を御受けのないばかりか、玄明が斯の如き使をするとは實に名利の奴隸である、誠に穢らはしき精神ぢやと仰せられて、七生の御勘當を蒙り、其上玄明が平素坐つて居られた床下の土七尺ほど取りて御捨てになりたと云ふことです、皆様これを何んど御覽なさる、是れが眞の出家の心といふ者です、其御心の御潔白なる、恐れ入る外は有りませぬが、斯くまで御寺の請待も御受けがなく、寺領も御受けがないといふは、深き難有御恩召のある事で、抑々御開山に於かせられては、清和天皇の御嫡流で入らせらるゝ處、後鳥羽天皇には隱岐に御幽閉



に相成り、土御門天皇には土佐に御幽閉に、順徳天皇には佐渡に御幽閉に成りました。而も高祖の直接の御血統の方は皆此の通り逆臣ばらのために斯くなり、世は皆倍臣の所有となりましたから、如何に御出家の御身とはいひながら、かくまでに大義名分の明かならざる世の中に、何にぞて倍臣輩よりの献納物を甘んじて御受取なさりまやうぞ、實に七百年の今日迄、御威靈の尊きことが残りて居ります、これが實に誠の勤王家で入らせられたことが分りまじやう、乍去世の勤王家と稱するのはつまり四恩報謝を實行遊ばしたのであります、斯くまで勤王御誠忠の御開山、時頼をして勤王の實を擧げしむるまでの御教化は、實に八家九宗の御開山中にも稀なる御祖師様の御化導を我々まで蒙むるとはあらありがたや忝けなやと、御恩報謝の稱名、南無釋迦牟尼佛と唱ふるが肝要、

第七 傑出の門弟縉素に富み玉ひし御徳

前回にては勤王誠忠の御徳を述べましたが、今回は多くのよい御弟子を持ち遊ばしたことを述べまじやう、深山には大蛇を生じ、大海で無ければ鯨の如き大魚は生れます

まい、御開山の坐下に尤い御弟子の多くあるは御開山の御徳が廣大無邊で入らせらるゝからです、就中尤い出家の御方にては太祖様である、此御方は能登の總持寺を御開きに成り、玄翁様には名高き那須原の毒石を打破つて諸人の患を御救なされたといふことです、在家の御弟子では先以て最明寺時頼公であります、公は如何に本宗の御教義にて御安心なされしか、日用の政事家事上まで應用されしものと見えます、便宜上だから宗教を信するといふのは違ひます、公が常に子息時宗公を教訓せられました四十八箇條の家訓があります、其一二を御聞に入れまじやう、

樂しき人を見ても羨む可らず、貧しき人を見ても賤しむ可からず、富貴も、貧窮も、過去の宿因なれば、今なす處の利鈍にはあらずと悟り見れば、願ふべき富貴もあらず、厭ふべき貧賤もあらず、大事小事に付けてよき事ならは必悪事あるべしと、來らぬさきに思ひまうけ玉ふべし、又あしきことありて、あながちに歎く事は愚痴の至りこや、申べからん、されば世間は善にも定まらず又惡にも定らず、これに向て何をか悦び何をか恨みむ、

此二句を考へて見ますれば、修證義の「生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし」といふ、厭はず欣はずの御安心、即ち修證不二の妙訣を得られたに依り

て此の通り願ふべき富貴もあらず、厭ふべき貧賤もあらずと示されたのじや、楠公も本宗の信者でありますから、『今昔寫寶袋』といふ書にはかやうにかいてあります、人間界にあらん者は、敢て樂を求めず、苦をも厭はず、世の中は斯の如き者と心得て忘らす、食らす、富を樂やまず、貧賤をも輕んぜず、心正直に交るべし、

時頼公の安心も、楠公の安心も、皆一轍である、夫れは皆同一轍の教を受けて安心をされたからであります、全軀人といふ者は、先づ宇宙の道理、社會の道理を確かめて、然る後に軍人なり、官吏なり實業家なりにならねばならぬのであるが、近來の學者は少しも此に目を付てないから、誠に人を眞底から感化する事が出来ませぬ、權利義務を以ての治め方は、丸で殺風景で、到底罪人の消滅する事はありませぬ、宇宙と云ふ觀念、社會と云ふ觀念がないから、人が死んだ時祭文を讀むに、冀くは、在天の靈、髣髴として來り享けよといふもあれば、幽界の鬼神と云ふ者もあれば、地下に眠せよ、偕ては永眠せよ等別々な終極の祭文で、宇宙の觀念が定つてないから處世の方針も定つてない「世の中は貧者に徳者、苦者、樂者、何じや較じやとて末は無茶苦茶」で、

無茶苦茶安心してござります、處世の方針が定まつて居りませぬから、倫理も定つて居りませぬ、否な倫理は恐れながら御勅語で定まつて居りますが、教育社會にては定まつて居らぬ様子で、博士等の著書の中を看ますると、倫理道義の目的は飲食のためにあらず、勤勞のためならず、競争の爲めならず、智識のためならず、良心主義でも無ければ、忠孝が目的でもない、自愛々他兼愛いづれも究竟の目的ではない、生存を以て人生の目的とし、快樂を以て其方便となすより、寧ろ保命を以て人生の大目的となすなどと論斷した者を見ました、夫れから、又幸福主義、非幸福主義の二つで、今に論は絶えませぬ、教育社會が其通りだから益々徳義が廢れます、つまり今日の徳義と云ふ者は、命令的で止むを得ず苦痛を堪へて守ると云ふので、信ずる根本が薄弱ですから、外面だけの徳義で、斬りさしの花と一つこと、實を結ぶことはありませぬ、是が世に不品行者の多い原因です、一日の行持の種子を播けば、成佛の花開き、衆生濟度の實が結ぶといふ快樂的徳義ではない、苦痛的徳義でござります、是れ則ち宇宙の大觀が定まりてないからです、換言すれば心から信ずべき眞理が發見されてないからで

す、ソコデ近頃は名譽と言ふ者を標準として徳義を重んずる人があるが、誠にかうなりては國家の前途が想ひやられます、名譽は一時の花で、實ではない、實らぬば役に立ちません、次は有所得を以て標準として居る者があります、己れが是れほどの事を仕てやりたら、これだけの報酬があるだらうといふのを徳義と想うて居る人がある、名譽を得んかため、報酬を得んかために徳義を行ふたら、商賣と同じことである、日本現今の徳義の標準は名譽と有所得とを以て標準とされて居りますから、誠に危険千萬です、如何となれば、國家の地盤たる倫理の基礎が此の通り朽て居ります、是れでどうして國家が持てまじやうぞ、此れほどに恐ろしいことに逼り居るのを見ながら、彌陀の本願や四個の格言だけを説て居た處が、どれ程の國家に利益がありましたやうぞ、修證不二の御安心で無かつたなら、世の中は名譽と有所得の競争場裡に陥りて仕舞ひます、然るに時頼公や楠公の宇宙觀より定められた處世の方針は、敬服の外は御坐りませぬ、楠公の書殘す文を見ますとかうである、

●極楽を願はんより地獄を作るな ●壽を求めんより人の勝を厭へ ●立身を思はんより御恩を忘るな ●金錢溜め

んより借毀するな ●手柄立なさんより御意に違ふな ●慈悲をする共代りを取るな ●人は名利に使はれて一生を苦む ●一得あれば一失あり ●衣服は寒くなきほど ●食物は腹一盃 ●居處は風雨を凌ぐための者 ●書は讀むやうにかけ ●物は聞えるやうに云ひ ●盛方より驢梅 ●酒を呑とも呑るな ●珍しき事に賢少し ●弓腰砲はあたるが重寶 ●學問は理を知るため、

又時頼公にはかういふてあります、

出仕の折りふしいでたち玉ふべき衣裳の事、よき人に交りても悪しき人にまじはりてもさのみ秀でず、みくるしからぬやうに心得ていでたち玉ふべし、色よき花をみては手折らずとも佛神にまいらせばやと思ひたまふべし、たとひ佛神の御前ならずとも此心掛あるべきをや、あながちに心にまかせて折りとる事然るべからず、よく心得玉ふべし、

我が身つかふだにも、心にかなふ事はまれなり、前世の戒力の我にをとりたればこそ、我をば主を頼むなれ、此ことばりを思ひときて憐をかけ玉ふべし、酒狂ひする人、又はあかましき人の交りたらん所をば透を守り、おもしろくして立

此の楠公や最明寺殿の平素の心掛はどのやうに在りたかは、此の金言にて思ひ計ること  
 とが出来ましやう、これが本證妙修の御安心を得るときは衣裝のきぶりや酒席の交り  
 方まで注意する者であります、右やうの心掛ある楠公の息子正行公を教訓するも時頼  
 公の時宗を教訓するも、皆禪宗の御安心を以て教訓されました、時宗公の膽力の大  
 る、頼山陽は「斗の如し」と申されましたが、其斗の如き膽力ある時宗公は其幼き時  
 りての憶病者でありたさうです、そこで父親のすゝめにより祖元禪師に參禪をせられ  
 ました、其時の問答がこうあります、

時宗問うて曰く、人生の憂苦強弱を以て最となす、如何して之を脱せん、禪師答  
 て曰く、之を脱すること甚だ易し、正に怯弱の來處を閉づべし、時宗曰く怯弱何れ  
 よりか來る、禪師曰く時宗より來る、然るに時宗之を解しかねました、そこで反問  
 して云ふには、時宗怯弱を忌み嫌ひますのに、なぜ時宗より來ると申しますか、禪  
 師の云ふには、それなれば誠に明日より時宗を棄てなされ、果して膽力天地の如き  
 者になります、それはどうして時宗を棄てましやう、其時禪師五箇條の要訣を示さ

れたと云ふことです、

- 一、外界の庶事物に心意を奪はるゝこと勿れ
- 一、外界の庶事物に貪着すること勿れ
- 一、念を止みんする勿れ念を止めずある勿れ只一念不生を務むへし
- 一、心量を廣大にすへし
- 一、勇勢を保持すへし

時宗公、此の秘訣を得まして、心大に悦び、申すには吾れ人間至極の大寶を得たり、  
 又天下の大と雖も、憂ふるに足らずと、果して日本開闢以來未曾有の國難即ち元寇十  
 萬の兵を塵にして天下を泰山のやすきに据え置く大功績を立てられました、此の時  
 宗の功績は單に教育によることです、此の教育は實に禪宗の御安心によりましたので  
 あります、皆様斯のやうな國家に大利益に與ふる信者を澤山作り出したのは單に御開  
 山の御徳によると申す者です、我等斯の如く厭世に傾かぬ宗門の御流に浴すといふは  
 如何なる好因縁ぞと仰いで御恩報謝の稱名悦ばるゝか何よりの肝要、

### 第八 深山幽谷の一道場より八百餘萬の檀信徒を出し玉へる御徳

偕て前回より席を重ねて承陽大師の御徳を述べましたが、今回はこれまで述べ来りたる事柄に結びを付けて、申しませしやう、實に釋迦如來の御家風を其まゝ傳へ來りたるは承陽大師さまの御宗風であります、他宗派の御開山方は動もすれば、多少の批難を免れませんけれ共、我が承陽大師さまの御徳に至りては、一分一點も指をささるゝ處はありませぬ、實に日本八宗の祖師として餘りあるは大師さまであります、試に御覽なさい、親鸞日蓮の兩上人等は、高德の方には違ひなけれ共、遠島流罪の難に遭ひ玉ひしは、幾分の徳缺けたりといはねばなりませぬ、時の將軍や天子をも感化する程の大徳でありましたならば、決して此の難はありますまい、傳教弘法の大師方は大徳の方には相違ありませんけれ共、佛法弘通の方便として技術若しくは産業などに從事せられて、眞面目に佛法を弘通することか出來なんだ、其れにひきかへ、我が承陽大師

様は時の將軍は勿論、天子までも教化し、少しも時世に逆ふことはなく、又た技術産業を方便とする虞もなく、單刀直入以て眞實の佛法を御傳へになりました、譬へば玉の瑕玼なきが如く、山間幽谷の老梅樹の如く、得て犯されぬ處があります、山間や谷間の梅花などは少しも世の塵に汚さるゝ様なこともなく、其清らかなること雪の如く、馥郁たる香氣あれ共、世に阿ることもなく、去りながら、時節到れば自ら諸人の尋ね來りて其勝を賞るが如き大師様の御徳であります、昔し大師様も日蓮上人と琵琶湖のほとりを御同行遊ばした時に、いづれも様方御足汚れたるを以て御濯ぎ遊ばしました其時に日蓮上人は惜氣もなく湖水の中に入り、ザブ／＼と御洗ひなされたに、大師様は柄杓に湖水を汲み取り、僅か半杓だけしか御使用なさらなんだと云ふことです、之れを杓底の恩と申します諸君これを以て大師様の平常の行持を御覽なさい、澤山な水ぢやから、イクラ使用つてもよさうな者ぢやが、さうではない、吾人が日用生活して居るのは、皆前世に福德の種子を下して置た結果ぢや、それを今澤山あるからというて惜氣もなく使用するとき、後の世に結果の實ることばなき筈ぢや、ことに大師

様は末世の我等を惑み遊ばして、ワシが茲に一滴の水をも費さぬは末世の衆生のため  
ぢやとの思召である、水に不足せぬのも皆福徳であります、私が臺灣に居りし頃、衛  
戍病院や其他野戦病院などの或る患者を見まするに、手に百圓あまりの紙幣を握りて  
之をやるから一杯の水を呉れと云うても得られぬ者を往々見受たことがある、之れが  
水の徳が盡きたと申すもの、而して御生涯の間、御質素の御法服を召させられ、御身  
には一錢の御貯へもあらせられなんだ、去れば大師さまの御示にはかうござります、  
世間衣糧の資具は生得の命分ありて求むるに依ても來らず、求めざれ共來らざるに  
もあらず、只任運にして心に挟むこと莫れ、

備て、質撲節儉のことは皆美德でありますが、其質撲節儉をする目的は衣食住を豊か  
にする目的に外ならざるは世間の有様である、それ故に此の節儉をするも中々の苦み  
であります、それは畢竟安心と云ふ者がないからである、安心より流れ出でたる節儉  
なれば、苦痛處か却て快樂であります、どう安心するとなれば、すべて吾人の衣食住  
と云ふ者は、前世で定つて來たのぢやから、致々汲々として求めたからとて來る者で

もない、ソナラ求めんからとて來ぬ者でもないぞよとの御化導であります、所謂求  
めず、願はずの御安心であります、衣食住のことでまで御化導下されたは、實に有難き  
大師様の御恵であります、今や皆様も御承知の通り、内地雜居の世の中で、誠に騒が  
しきことになりましたが、夫れに就て、益々必用なのは國民の道德であります、其  
道德の中父子親ありとか、君臣義ありとか云ふ道德も大切であります、就中大切な  
のは外國人と交るに就ては、即ち信用、勉強、節儉、武勇、優美、細心等の徳を修む  
るのが尤も大切であります、此等の徳の必用なることは今更云ふまでもなきことな  
ら、縦ひ如何なる道德も安心より顯れ出でたる道德でなければ沙の上の建物の如く、  
甚だ危険なものであります、又た名利を念として、信用勉強等の徳を修むるときは罪  
業の因となりますから、名利を念とせず、罪業に陥らずよく宇宙の真理に契うて日用  
の一事一行悉く佛果菩提に趣く處の徳義が尤も肝要であります、去れば之を實地に  
實行せられ、萬世の模範を示されましたは、實に承陽大師様であります、ソコテ恐れ  
ながら承陽大師様の佛法を評し奉れば未來を説て未來に傾かず、厭世を説て厭世に流

れず、文字教綱に陥らず、世の道義の模範を示して祈禱靈驗の怪談に走らず、理實兼全の佛法は即ち大師の佛法であります、故に複雑なる今日の世の中には益々大師様の佛法が必用であります、老若男女賢不肖ともに信仰して尙餘りあるは我宗風であります、それ故に日清戦争以來禪學が非常に陸海軍人に歡迎せらるゝといふも、實際に於て利益があるからのことです、往昔我禪宗は如何なる處まで廣まりしかといふに三百諸侯の七八部は皆禪宗信者で、次に禪宗をば劍道、俳句、繪畫、茶湯、謠曲、插花等に至るまで應用して優美なる思想や、快活なる氣象、又は細心、考慮、勇猛、果斷、等の精神を養成した者でありますから、世道人心を啓導せしことは鮮なからざるほどでありました、此禪宗は獨り日本に於て世の利益になりた斗りではない、支那四百餘州の佛教、朝鮮其他新領土の臺灣の佛教も、宗派はと云へば皆禪宗であります、尤も支那に於ては晋唐宗の頃には、傑出の僧侶輩出せられましたから、禪宗は仲々の全盛を極めまして、白樂天、蘇東坡等は皆禪宗の信者であります、然るに支那、朝鮮現存の禪宗は形式だけであつて、其精神といふ者はない、精神的禪宗は僅かに日本にあるだ

けである、去れば日本の禪宗として優に十三宗の首位を占めて居るは我が曹洞宗であります、此の勢力ある宗門の宗祖は承陽大師様であります、是に由りて見ますれば、佛教の中でも重なる勢力を各國に有して居るのは、禪宗であります其禪宗の精神骨髓は日本の曹洞宗にしかありませぬ、其道場は越前の山奥吉田郡の永平寺にござります、去すれば只だ道理上宗教の帝王佛教の總府と云ふ斗りではない、實際に於て佛教の總府といふことが出來ます、故に承陽大師は日本の釋迦如來であります、永平寺なる吉祥山は靈鷲山に相違ありません、大師の御辭に永平老漢恒に人間に在りて盡未來際當山の境を離れずと誓はせ玉うたのを見れば、彌々大師の御淨土たるは疑ひなきことでもあります、彌々信心肝に銘じ、御恩報謝の正道として一日の行持を等閑にせぬやう悦ばるゝが何よりの肝要、

結言

以上承陽大師様の八通りの徳を述べましたから、大抵諸君も、我が承陽大師様の、如何なるお徳を持ち玉ふお方であるかと申すとも、別つたと思ひます、則ち、

初め眞實の佛法を宣布し玉ひしお徳より、終りは山間の僻地より一萬餘ヶ寺の寺院を出し千萬人に近き信徒を得られたと云ふとまで熟々考へて見ますれば、我が承陽大師が、其徳に於ても、其行ひに於ても、其の一切衆生を憐れみ玉ふ慈悲心に於ても、天晴一宗の高祖として、最も尊敬すべきとであるが、自ら知れる次第である、苟も、我々曹洞宗の御流れを汲んで、日々夜々承陽大師様の御恩に沐浴して居りますものは一日一夜、一時一刻たりとも、承陽大師の御恩を忘れず、大師様のお思召に合ふやうに、本體妙修の道理を辨へ、生を明らめ、死を明らめ、世の無常の有様を悟りて積んだる罪過を懺悔なし、戒法受けて、佛の位に入り、自らの行ひを慎んで、十重禁戒も犯さぬやう、何事でも善いとはして、悪いとはせぬやうに、確然と心を固め、我が佛か、佛が我が、少しも隔てのないやうな清淨の本性を發露せられ、日々の往來が、直に佛祖の行持と合點が往つたら、治生産業、素より正法に外ならず、佛法を外れたるものではない、飯を食ふのも、お茶を呑むのも、残らず、佛作佛行ぢやと心得て、さて其の行持が出来るは、偏に佛祖の御恩徳、佛祖の御恩徳とは申しながら、分けても

日本國のお互は、承陽大師様の御蔭を被つて居るとであれば、能くく行持報恩の心懸けを失はぬやうにして、幸ひ、結構な因縁で、大師の六百五十回の御遠忌に遭ひ上り、無二の法樂に浴するところが出来たのを喜んで、餘念なく承陽大師様の御恩に報いられますやう、私から、諸君御一同に御頼み申す次第でございます、

南無大恩教主釋迦牟尼佛 高祖承陽大師

生々世々 值遇頂戴

承陽 大師 終



跋

余曾て云ふ、演壇上の布教は一時の効ありて、永久の益少く、文壇上の傳道は一時の効乏しくして、永久の利あり、眞實の傳道者は、應に此兩能を備へて始めて圓滿を期すべし、但、惜む、今の所謂布教師なるもの、多く此兩能を具する能はず、社會救濟の道に於て缺陥頗る多きを見るをと、

芳川雄悟師、夙に圓轉滑脱の辯を以て諸方に巡教し、忙餘筆を執りて本書を編し將に世に公けにせんとす、師の如きは、實に傳道上の二長所を具備せる人、乃ち稱して圓滿の布教家となすべき歟、余師の知遇を得てより茲に歳餘、今や師の囑によりて、本書文字上の校訂をなし、欣慕措く能はず敢て一語を附して師の効を頌すと云爾

明治三十三年六月

日

鴻盟社編輯局に於て

來馬琢道謹識

明治三十三年六月十日印刷  
明治三十三年六月十三日發行

定價金八匁

編輯兼  
發行人

今村金治郎

東京市芝區露月町  
十八番地

印刷人

山本鏌次郎

東京市京橋區西紺屋町  
廿六番地



印刷所

株式會社  
秀英舍

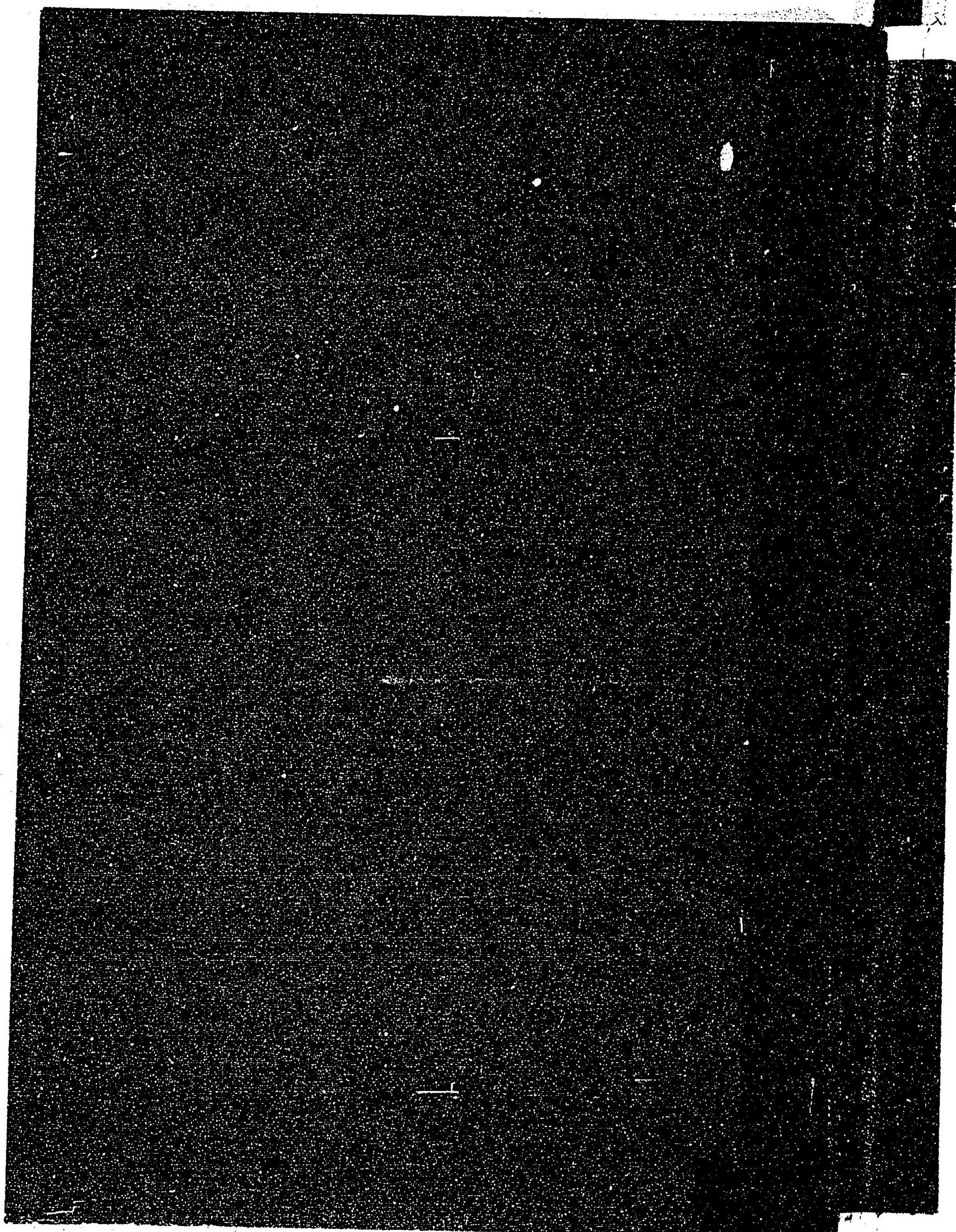
東京市京橋區西紺屋町  
廿六番地

發行所

東京市芝區露月町  
十八番地

鴻盟社

B. 55



6

承陽大師

芳川雄悟

国立国会図書館

019535-000-4

特47-796

承陽大師

芳川 雄悟/著

M33.6

ABG-0301



特4

7

